

心の声に耳をかたむけて

下仁田町立 下仁田中学校

三年 岩井 ひなた

私には大好きな妹がいます。生まれてすぐに心臓の病気があることがわかりました。妹の心臓には3ミリの穴が空いています。見た目には病気があることはわかりませんが、生活の中で気をつけなければならない事はたくさんあります。

例えば、家族が大好きな花火です。私は花火に照らされた家族の笑顔が大好きでした。しかし、妹に笑顔はありません。煙を吸い込むと呼吸を荒げ涙を流しながら苦しがるのです。その日妹は、煙を吸わないように部屋の中で花火を楽しむことになり、私はガラスの向こうにいる妹に向けて花火の花を咲かせていきました。しかし妹は、我慢できず外に出てきてしまったのです。そこで、花火は中断されました。モヤモヤした

気持ちで部屋に入ると母は妹を抱きしめながら、私に言いました。「ひなた、また花火しようね。本当にごめんね。」と。その時、私の心のモヤモヤが弾けました。「どうしてお母さんが謝るの？ 苦しくなるから部屋にいてって言ったのに！ 悪いのはこの子でしょ!!」そう叫んでいました。妹が母の腕の中から泣きながら言いました。「ひなた、ごめん。一緒に花火がしたくて。私、もう花火しないから。ごめんね。」と。かわいくてかわいくて大好きなのに、私は妹を傷つけてしまいました。その日以来、わが家の夏から花火が消えました。

花火のない夏が我が家の当たり前になってきた去年の八月、私は町で行っている海外派遣事業でオーストラリアに行きました。現地の小学校の生徒と交流する中で、気になることがありました。その学校には日本のような特別支援学級というものがありませんでした。なんと、オーストラリアでは、一人一人の違いを個性として受け入れ、能力や障害の有無に関わらず、すべての生徒が一般学級で能力を発揮できるように環

境を整えるようにしていました。ホストマザーが言いました。「病気や障害にばかりに目をむけるのではなく、その人自身をみつめることを忘れないで。」と。

ハッとしました。やるべきことは妹を部屋に閉じ込めることじゃない、病気を理由に我慢させたり、何かを諦めさせることじゃない。大切なのは、妹の心に寄り添い、できる限り環境を整えてあげることだと気づきました。病気の向こう側の妹自身をみつめて、心の声に耳を傾けて。

日本に帰国してすぐに家族へ「今年の夏は花火をしよう!! 家族みんなで!!」と伝えました。みんなで相談し、妹には常に風上にいてもらい、マスクを着用してもらいました。そして、弟と一緒に、花火の持ち手に割り箸を足して長くし、煙を吸い込みづらくなるよう特製花火を作りました。何年かぶりに花火が家族の笑顔を明るく照らしました。最後の花火を弟が手渡すと妹は、はにかみながらそれを受け取りました。マスクで隠れた涙でくしゃくしゃの笑顔を花火が照らしました。そして震える声で言いました。「一緒にでき

た。最後までできた。ありがとう」妹の笑顔は私の胸に強く突き刺さりました。そして思いました。病気や障害を理由に諦めさせてしまう社会ではなく、誰もが夢や希望を叶えられるような「諦めなくていい社会」になったらどんなに素敵だろうと。

私達が生きているこの社会には目には見えない障害や病気を抱えている人がたくさんいます。今、この瞬間にも生きづらさを感じ、病気や障害を理由に何かを諦めているかもしれません。その人が、あなたの隣にいるかもしれません。私達はそんな想像力を持って社会をみつめていかなければならないと思うのです。誰ひとりとして夢を諦めなくていい世界へ変えていくことは、この社会に生きる私達全員の課題です。だから私は目をそらさず自分自身の課題として捉え、考え続けていきたい。

妹の心臓にある3ミリの穴は塞がることはありません。でも、一人一人の配慮や理解で、誰かの心の穴を塞ぐことはできるかもしれません。そう信じて私は今日も心の声に耳を傾けていきます。